



朝日文楽会 殿 西予市

■事績

日本の伝統芸能である「文楽」は、太夫、三味線、人形が一体となった総合芸術で、愛媛県内でその一翼を担う「朝日文楽」は、明治初期、旧朝立村(現・西予市三瓶町)で人形に衣装を着せて舞わせたのが始まりとされています。戦時中に一時活動が途絶えたものの、戦後には地域住民の間で文楽復興を願う声が高まり、盛況な公演が行われるようになりました。「朝日文楽会」としての活動は 1961 年頃から始まったとされています。三瓶地区で長く文楽が盛んだことから、地元の三瓶高校には朝日文楽研究会が創設され、1997 年には小中学生による「こども朝日文楽クラブ」が誕生するなど、地域をあげた伝統芸能の継承が行われています。2015 年には文楽専用の舞台装置を備えた「朝立会館」が完成し、現在約 20 人の会員がここを拠点に練習を重ね、県内の文楽 5 座が一堂に会する秋の合同公演、地元の文化祭など定期公演に向けて活動を続けています。「こども朝日文楽クラブ」で文楽を経験した若手メンバーも「朝日文楽会」に参加するようになり、地元の地道な取り組みが伝統芸能の継承につながっています。三味線と太夫の語りにあわせて 3 人の人形遣いが三位一体で織りなす舞台芸術は、息の合った動きと呼吸が大切だといいます。地元で長く根付いた伝統芸能「文楽」を今後も継承していこうと、日々活動を続けています。